

一九九四年刊行の『哲学紀要』第十八巻にはつぎの表題で九通の地震報告が収録される。「一六八七年十月二十日ペルーにおける地震および一六八七年二月一日・一六九二年六月七日ジャマイカにおける地震の報告若干を含む王立協会会員ハンス・スローンの書簡」^①。ここではまず全体の解題が付され、一六八七年ペルー地震に関する第一の報告とスローンによる一六八七年ジャマイカ地震に関する報告のあと、一六九二年の激烈なジャマイカ地震について六件の報告が提示される。「各位殿。ここに同封する書類は」と彼は冒頭で述べる。「複数なる地震の報告と相異なる多くの観察を記載し、王立協会の会合で会読されたものである。ここに記録された震災の規模と付随する事柄は多大であって、保存して後世に寄与すべく完璧な形態で公共に供したい。」ペルー地震の報告は別途扱うとして、ここではまず彼自身による一六八七年の被災体験を検討したい。

一六八七年ジェームズ二世は王政復古に功績あるアルベマール公爵の子息クリストファーをジャマイカ総督に登用し、その侍医にスローンが任じられた。九月十二日彼は王室護衛艦アシスタント号でポーツマウスから出発し、ポルトガル領マデイラ諸島や西インド諸島バルバドスを経て、十二月十九日ポート・ロイヤル港に到着した。公爵の急逝によって同地での駐在は十五カ月に止まるが、一六九二年大震災の前触れとも言うべき震動にこのとき遭遇した。なお、カリブ海での成果を後年かれは『ジャマイカへの航海記』として刊行し、そこには詳しい航

① Hans Sloane and Alvarez de Toledo, A Letter from Hans Sloane, M.D. and S.R.S. with Several Accounts of the Earthquakes in Peru October the 20th 1687. and at Jamaica, February 19th. 1687/8 and June the 7th. 1692.

Philosophical Transactions (1683-1775) Vol.18(1694), pp.78-100. Royal Society.

海日誌や現地の概況とともに、観察した膨大な植物の解説と図録が記載される。^①

〔報告第二〕一六八八年二月一日日曜ジャマイカで発生した地震の報告。現地に居合わせた

ハンス・スローンの執筆による。

ジャマイカの住民は毎年地震にも脅える。大雨のあとにそれが襲うと説く者もある。地震のひとつが一六八七年二月一日に発生した。午前八時頃一階の居室で筆者は、あたかも建物の土台が持ち上げられるかのようになり、飾り棚や他の家具が揺れるのに気づいた。何事かと窓辺によって見渡すと、頑丈な鳥小屋で鳩などの鳥類が驚愕して翼を広げ、飛翔もできず、凝固したままであった。異変が起き、煉瓦造りの高層は危険と悟って、急いで戸外へ出ようとする。だが、二部屋ほど通り抜け、階段まで来ると、揺れは止まった。地震が発生したのである。僅かな休止を挟み、震動は三度あった。いずれも一分程度にして、微かな噪音を伴う。二階では柵から多くの物が落下し、上方の階ほど被害は大であった。この地震は島の全土でほとんど同時に感知された。多くの家屋が破壊されて荒墟となり、屋根瓦の剥がれた家もあって、被害を免れたのは少数である。地に足が就かぬのを感じて、だれしもみな恐慌状態に陥った。ポート・ロイヤル港の船舶もやはり

① Hans Sloane, *A Voyage to Jamaica, (A Voyage to the Islands Madra, Barbados, Nieves, S. Christophers and Jamaica, with Natural History.)*. London, 1707. Volume 1, pp. 1, 47.

W. J. Gardner, *A History of Jamaica, from Discovery by Columbus to the Present Time*. London, 1878, pp.69-70.

揺れた。おりしもヨーロッパから来た人物は、島の東方でそのときハリケーンに襲われたと言う。馬上にいた人物は震動を感じなかった。所有する農園の近くである貴紳は、地震が襲来し、北方へ通過する間、波動する海洋のように大地が隆起したと筆者に語る。この震動を感じてまもなく、数マイル離れた丘で樹冠が揺れ、そこまで震動が達したことを知ったのである。ジャマイカ島やその周辺に住むスペイン人は平屋しか造らなかつた。それらは一階の部屋だけで構成され、障壁は地底に据えた支柱で護られる。かくして彼は他の様式における建物を避け、地震による危険を防ごうとする。山岳地帯で放置された裸地を私は見たが、それが地震の衝撃で丘陵から脱落し、荒れ果て不毛であると住民から知らされた。①

カリブ海に位置するジャマイカは、全島の面積約一万一千平方メートル、徳島県と高知県を合わせた範囲に近い。西インド諸島ではキューバ、エスパニョラについて第三の広さである。紀元八〇〇年頃この地に渡来したタイノ族は、南米各地に居住したアラワカン語族の分派と思われる。漁業とともに農耕を営む彼らは、首長のもと六万人に達したとされる。一四九四年コロンブスは第二次航海の際この地に上陸し、やがてスペイン人によって植民地としての建設とサトウキビの栽培が開発される。彼らは多くのタイノ人を奴隷としたが、あるいは山奥へ逃亡し、あるいは伝染病で死亡し、過酷なアフリカ人奴隷の導入が開始される。十七世紀の初頭ジャマイカの人口はほぼ三千人と推定され、少数のアフリカ人奴隷を含んでいた。ピューリタン革命を達成したクロンウェルは、スペイン

① A Letter from Hans Sloane.

との抗争のなかで、西インド諸島へ艦隊を出動させ、一六五五年ジャマイカを占領した。その五年後マドリッド状約によって正式にこれを取得し、防衛と交易に絶好の地、ポート・ロイヤルを首都に定める。①

やがて王政復古で即位したチャールズ二世はジャマイカでの植民地建設を本格化し、すべての住民にイギリス王国の法制を適用すると宣言し、統治者たる国王の代理人として初代の総督エドワード・ドレイレイを任命した。②一六八七年からポート・ロイヤルに在留したスローンは、ポート・ロイヤルの地誌をつぎのように略述する。

「ポート・ロイヤルは砂地の岬に位置し、そこからリガンズへ砂地の狭い地峡がほぼ三マイルにわたり走る。この都市にはきわめて好適で安全な港が築かれ、陸地と浅瀬であらゆる強風から護られる。」「この都市は約千五百の建物から成り立ち、それらはまず木材で、のちには大半が煉瓦で建造された。イギリスの艦隊でここに来る船乗りや軍人の便宜のため造られたのである。」この記述は十八世紀初頭に刊行される著書『ジャマイカへの旅』の緒論に見出されるが、大地震以前の様子を説明したと思われる。③

スローンをとおり王立協会に供された報告の第三から第五までは、一六九二年大地震の証言であり、主として

① History of Jamaica, Encyclopedia Britannica online.

② Edward Long, *The History of Jamaica*, London, 1774, volume 1, pp.9-12.

この書物は差別的なニグロ観を説いたとして古来非難されるが、イギリス統治下におけるジャマイカの統治組織については詳細である。

③ Sloane, *A Voyage to Jamaica*, Volume, p.lviii.

ポート・ロイヤルについて比較的早い時期に書かれたものである。

〔報告第三〕 ジャマイカに在留し、一六九二年六月七日怖るべき地震に遭遇した人物の書簡抜粹。

ポート・ロイヤル港において彼自身が体験し、その従僕も目撃した出来事の報告。

ジャマイカ、一六九二年六月二十日

(一六九二年六月) 七日午前十一時より十二時の間に発生した怖るべき地震は、ポート・ロイヤル市街十分の九を二分間で壊滅させ、波止場一帯のすべてをも一分足らずで破壊しました。被害を免れた人は稀であって、私自身もすべての人材と財貨、わが妻とふたりの従僕、B夫人と彼女の娘を喪いました。逃れてきた白人の小間使が私に告げました。二階の居室にいた女主人が屋根裏部屋へ登り、そこでは地震を知ったB夫人とその娘が子どもを抱いて駆け降りるよう命じます。だが、振り返るや、屋根裏の階段にまで津波が迫り、家屋が沈下してはや三十フィートほど水中にありました。その朝私と息子はリガーニアへ出掛け、ポート・ロイヤルとの途中で地震に襲われました。そこでは風もないのに、怒濤が水面から六フィートもの高さに荒れています。神慮に救われてリガーニアへ引き返すと、すべての家屋が倒壊し、黒人の家を休めるところが皆無でした。この地震は二四時間に五回か六回繰り返し、山岳の大きな部分が日々崩れ墜ちました。私たちがなお怖れる峻厳な判断を、なにとぞ転じてくださるよう神に祈ります。

〔報告第四〕 一六九二年ジャマイカからの書簡抜粹。ジャマイカ地震に発する病患とその原因に
関して。

私たちは(日々小さな震動に替えています)かの大地震以来死亡率の激増を憂いております。すなわち、ポート・ロイヤルから逃れた人々のほぼ半数が、大気の変化、乾燥した住居や暖かな部屋の欠如、さらには医薬と用品の欠乏による悪性の熱病のため、死亡しました。

〔報告第五〕 別の人物による一六九二年九月二十日付書簡の抜粹。同じく六月七日の怖るべき地震を報告する。

ジャマイカ、一六九二年九月二十日

今次の大震災については勿論すでにお聞きになったでしょう。だが、私も可能なかぎり詳細をお伝えしたいと存じます。まずはポート・ロイヤルの大半が沈没しました。埠頭が位置したところは、いまや深淵です。教会付近の通路もすべて氾濫し、上階まで水浸しになりました。大地が亀裂して人々を呑み込み、港湾の中央では道路が隆起しながら、逃れた者もあります。とはいえ、白人と黒人合わせて約二千名が一気に歿したと思われます。北部では千エーカーの土地と十三人が水没したのです。全島の家屋すべてが倒壊して、私たちは余儀なくあばら屋で暮らしています。十六マイル歩道の入口にあたるふたつの山が崩れて繋がり、河流が止まり枯渇したため、そこへのフェリーは終日休止しました。ただし、大量の魚類が捕獲され、困窮者の大いなる救いとなります。テロウでは大きな山が割れ、平地へ崩れ墜ちてあちこちの新開地を覆い、白人

これらのうち病死者に係わる（報告第四）は数行にすぎぬが、スローンは医家としての関心からとくに収録したと思われる。彼の著作『ジャマイカへの旅』の主体は前述のとおり植物誌であるが、緒論の別枠として長文の診断・治療記録が付せられる。そこでは同島駐在中に滞在中に診察した事例百四十以上が綿密に記述され、なかでも黒人男女の病状や風土病への対応が注目に値する。本稿の主題から逸脱するのを懸念しつつ、知られざるこの記録から若干を紹介する。「黒人の少年ジョン・ヤングスは」とスローンは書く。「ほぼ十二歳にして伝染病マラリアを患い、症状がほとんど止まなかった。いつものとおり私はペルー産樹皮を与える。彼は大量の虫を排出し、完治した。」こうした疾患や障害は亜熱帯特有の風土だけでなく、生活と労働の過酷な条件にも起因する。「農園の黒人や原住民は自分や子どもの寝台近くに暖炉を置く。健康を護るためでもあり、ブエや蚊やハエを駆除するためでもある。通常奴隷は苦役に追われ、夜は熟睡して容易に目覚めない。こうした若者がときには暖炉に触れ、手足を火傷する。かならず私は玉ねぎの湿布、食塩、混合スープを処方したが、これらはどこでも用意でき、そうした怪我に卓効を示す。」「ギニアから最近来た頑丈な黒人ひとりが熱帯性覆盆子腫に侵され、豆小さくは留め針の頭、大きくは豆粒ほどに発疹して、ついには皮膚の分泌腺が膨れて白味を帯びる。大きくなると腫れものの上部は白くなり、角皮と体液が部分的に通常乾燥して、かさぶたも浮かび、ときには膿も出る。

① A Letter from Hans Sloane, *op.cit.*, pp.79, 83-85.

こうした潰瘍が相当大きな症状もある。往々にして骨髄の激痛を訴え、私の治療したある患者をば陰茎や陰囊や両肘の発疹と診断された。彼には納屋で軟膏を塗布し、薄いお粥をできるだけ沢山食べさせる。この処方が必要不可欠であって、不潔な疾患から彼は完治したのである。ただし、片肘の腫れがまったく乾かず、焼き硫酸塩の投与でかさぶたを退散させ、全快に導いた。この疾患は伝染病とみなされ、黒人から白人へ、親から子へとつぎつぎに感染する。疱瘡ほど染り易いか否かは不明であるが、大抵の農園ではこうした患者が数名発見され、その都度上述の処方で行った。」①

翌年書かれたふたつの報告では、ポート・ロイヤルの模様とともに、他の地域における被害も証言される。

**〔報告第六〕一六九二年六月七日の地震に現地遭遇した貴紳による一六九三年三月六日付書簡の一部。
彼自身の体験と他者からの聴取報告。**

このたびのジャマイカ地震について知りたいと思われる事柄について、私の見聞をできるだけ忠実にお伝えします。ポート・ロイヤルに私は居住し、そこでの体験から始めます。一六九二年六月七日火曜の昼十一時から十二までの間居酒屋にいて、家屋の揺れを感じて、床では煉瓦の隆起に気づき、同時に街路から「地震だ！」との叫びが聞えました。ただちに戸外へ逃れた私たちは、だれもが両手を挙げて、神の救いを哀願

するのを見ました。街路を駆け続け、両側の家屋があるいは波浪に呑み込まれ、あるいは倒壊するのが映じます。街路の土砂は海面の波動のごとく盛り上り、足踏みする全員を亀裂に突き落すのです。そこを怒濤が襲い、哀れな人々をつぎつぎと巻き込みます。ある者は住居の梁や檣に縋り、引き潮のあと他の者は四肢を欠くまま砂中に発見されました。こうした凄惨を光景を見詰め、私たち十六名ないし十八名が立ち続ける小さな地所は（神護により）沈没を免れます。激しい震動が消えるや、家族が無事であるか否かを、だれもが知るろうと望みます。水上に漂う家屋の廃残を乗り越え、私もわが家へ向かったものの、為しえません。なんとか小舟を確保して、一面海のなか自宅へと竿さしつつ、漂流する難破船に数人の男女を見つけ、その多くを小舟に受け入れました。わが家の位置と思われるところまで漕ぎましたが、妻からも家族からも応答がありません。そのため前述の沈没せぬ地所へ引き返しました。しかし、だれもが島へ戻ろうと懸命であり、同じく私も妻と家族の安否を知りたいのでは、どうにもなりません。翌朝船から船へと探しまわり、神護なるかな！ついにわが妻とふたりの黒人を見つけました。いかに逃れたか、とそこで彼女に聞きました。

「家屋が揺れるのを感じて、すぐに跳び出し」と応えます。「残りの皆に叫びました。一緒に逃げて！」妻が出るやいなや、砂塵が巻き起り、黒人の女性に支えられつつ、ふたりとも地上に倒れます。その瞬間押し寄せた津波にあわや流されますが、ひとつの角材に縋って握りしめ、やがて小舟でスペイン船まで運ばれて助かったのです。

ジー・ストリート・エンドからブリーストワークに至る建物は、水没を免れたバルコニー八棟ないし十棟を残してすべて倒壊しました。そして、激しい地震が過ぎるや、水夫や船員が家々の掠奪に走ります。彼らの一、二名は掠奪のさなか第二の地震で転倒し、即死しました。

激しい揺れが遠のくと牧師は、祈祷に参加するよう全員に命じました。ひざまずく人々のなかにはユダヤ人も数名含まれ、やはり祈ると応えます。彼らもイエス・キリストの名で唱えるが聞えたそうです。注目すべき光景です。

数艘の船舶と軍艦が港で転覆し、破壊されました。カレン埠頭に停泊すつ護衛艦白鳥号は激しい津波と埠頭の沈没で多数の建物の上に横倒しとなりました。プーケ様が住む邸宅をもかすめ、居室を脅かすのですが、彼女は狼狽せず、数百の人たちを助け、彼らの命を救いました。

大気に現れたと噂される火の玉については、真つ赤な嘘であります。（地震のあと数カ月を経たいままで）それらしきものを見もせず、聞きもしません。とはいえ、山岳部で凄まじい轟音が耳を聳しました。そのため恐怖する多数の黒人が所有者のもとから脱出し、まもなく連れ戻されて、今後逃亡せぬと約束しました。

アシュボン様およびリガーニアのクエーカー信者ビンノック様と一緒に、私はソルトバンヌ丘陵に発する洪水を目撃しました。丘陵から（おそらく）二十ないし三十もの地域へは奔流して、多くの水門が一気に流失しました。それほど激しくないところ、丘陵の麓でも六ないし七ヤードの高波となりました。私たちが目撃した若干は山岳部において十ないし十四ヤードの高さまで荒れました。こうした驚愕すべき光景に接して立ち尽したのです。かくして私たちはほとんどの地域で洪水を体験し、それらがみな黒味を帯びるのに気づきました。その理由も把握できず、洪水の源も判りません。午後も夜間も、さらには翌朝の日の出まで溢れ続け、ついには塩田も水浸しとなりました。これで洪水の作用もお判りでしょう。塩田と山岳のいずれについてあなたはよくご存じだからです。

ご記憶かと存じますが、スペイン町から十六マイル参道へ至る山峡では河岸に道路があつて、途上の両側、

とくに川沿いはほとんど垂直をなしています。激烈な震動によってふたつの山が結合し、河の流れを止めました。抑止された河流は森林と草原に氾濫し、九日間都市にはなんの救援もありません。ポート・ロイヤルと同じく沈没するとおののき、人々は救援を待たず、田園への避難を思案します。河沿いの山が膨大な土塊を落としたため、だれしも余儀なくガナボアから十六マイル歩道まで歩きました。地震のあと私と妻は島でボスビ様のもとへ身を寄せました。この方も奥方とともに奇蹟的に脱出されたのです。その午後大農園へ来て、地面の数カ所に亀裂を見つけ、二頭ほど乳牛が墜ちて窒息した、と話されました。

地震ののちかなり暑い天候になりました。大群の蚊が発生し、同島への定住以後なかった現象とされます。ガレスの山々も十六マイル歩道のそれらと同じく破壊されました。大きな部分が崩れ、林立するすべての樹木が落下しました。山麓では大農園が土砂を浴び、下に埋もれました。

重要な事柄をいまはこれ以上想起できません。

〔報告第七〕同じ貴紳による追伸抜粋。地震のさらなる報告。

デイン、一六九二年三月二二日

リガーニアの山岳についてとくに険しい峰々がいくつか崩れました。ただし、最高峰が崩れたものの、ガローにおいて甚大な被害はないようです。

危惧された海水の噴出がポート・ロイヤルの街路ではなかったようです。だが、激烈な震動によって数カ所が亀裂し、居合わせた人たちが沈没します。砂地から熱湯が吹き出て、多くがこれを浴び、他は逃れまし

た。河川と都市について書いた事柄で、自身の目撃でないものもあります。いくつかの記録によれば、河流が都市に至るまでに、八日ないし九日経過したようです。①